

学籍番号：48423058	氏名：中村優志
学部学科名：生命科学バイオサイエンス学科	
留学先学校名 ジョモケニヤッタ農工大学	
<p>1. 留学の目的</p> <p>私がケニアへの留学を志望した目的は、発展途上国における農業・生物科学分野の現状を実地で理解し、理論として学んできた知識を現場で応用する経験を積むとともに、異なる研究環境や文化的背景の中で研究活動を行うことで、自身の研究者としての視野を広げることにある。</p> <p>日本では高度に整備された研究設備や制度のもとで学習を進めることができる一方で、実際の農業生産や病害問題は、気候条件、社会的制約、資源の不足など、より複雑な要因が絡み合っている。ケニアは多様な作物生産体系と独自の農業課題を抱えており、病害や環境ストレスに対する植物の応答を現場で観察できる貴重な環境であると考えている。</p> <p>特に私は、植物の免疫応答や環境適応機構に関心を持っており、実験室レベルで得られる分子生物学的知見と、実際の圃場や地域農業で観察される現象との間に存在するギャップを理解することが、今後研究者として成長する上で不可欠であると考えている。ケニアにおける留学を通して、現地の研究者や学生と協働しながら、限られた資源の中で研究を進める姿勢や問題解決の手法を学ぶことで、研究を社会実装へと結びつける視点を養いたい。</p> <p>また、英語を共通言語とした研究環境に身を置くことで、自身の研究内容を論理的かつ簡潔に説明する能力を向上させるとともに、異なる専門分野や文化的背景を持つ研究者との議論を通じて、多角的な思考力を身につけることを目標としている。国際共同研究が主流となりつつある現代の研究環境において、自らの専門性を国際的な文脈の中で位置づける経験は、将来的に大学院で研究を進める上でも重要な基盤となる。</p> <p>さらに、ケニアという社会的・経済的条件の異なる地域で生活し、学ぶ経験そのものが、研究対象を単なるデータとしてではなく、人々の生活や食料問題と結びついた現実的な課題として捉える姿勢を育てると考えている。留学期間中は、研究活動のみならず、現地の文化や価値観を理解し、地域社会との関わりを通して、科学が社会に果たす役割について主体的に考える機会としたい。</p> <p>以上の理由から、私はケニアへの留学を通して、専門分野の知識と実践的経験の両面を深めるとともに、国際的な研究者として必要な視野と姿勢を身につけることを目的としている</p> <p>2. 現地での生活について （住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など） 私の住居は大学構内にある学生寮であり、ドイツ人、バングラデシュ人、ルーマニ</p>	

ア人の留学生と同じ空間で生活を共にしていた。国籍も文化も宗教も異なる学生たちと日常を共にする生活は、日本にいただけでは決して得られない経験であり、日々が新鮮な学びの連続であった。寮では、食事の時間や夜の談笑の時間を通して互いの国の文化や価値観について話し合うことが多く、それぞれの考え方や生活習慣の違いを知ることができた。こうした日常的な交流は、単なる「留学生同士の同居」ではなく、異文化を持つ者同士が一つの生活共同体を形成する体験であったと感じている。

また、大学のキャンパス自体も非常に印象的であった。このキャンパスは日本の支援によって建設されたと聞いており、敷地内の至るところに日本とのつながりを感じさせる要素が見られた。例えば、天皇陛下による植樹や、日本式の橋などが設置されており、ケニアという異国の地にいながら、日本文化の痕跡を目にすることができた。このような環境は、国際協力が具体的な形として現れている例であり、日本とケニアの関係性を実感するきっかけともなった。

友人関係においても、非常に良好な関係を築くことができた。寮の仲間や現地の学生と共に食事をしたり、互いの家に遊びに行ったりする中で、単なる同級生や知人を超えた信頼関係が生まれていった。特に印象に残っているのは、クリスマスの過ごし方である。私は友人の家に招かれ、ホームパーティーに参加した。そこでは、家族や親戚、友人が集まり、食事を囲みながら会話や音楽を楽しんだ。日本ではあまり経験したことのない「家族と友人が一体となる祝祭の空間」に身を置くことで、宗教的・文化的背景の違いを超えた人間的な温かさを感じることもできた。

余暇には、ケニア人の友人と楽器を演奏して時間を過ごした。彼らは音楽に対して非常に親しみを持っており、即興的にリズムを合わせながら演奏を楽しむ姿が印象的であった。言語が完全に通じなくても、音楽を通じて気持ちが共有できることを実感し、文化や国境を越えたコミュニケーションの可能性を強く感じた。また、休日には友人たちと旅行に出かけ、ケニアの自然や街並みを見て回ることもあった。こうした旅は、観光としての体験だけでなく、現地の人々の生活や価値観を間近で知る貴重な機会となった。

さらに、余暇の時間を単なる娯楽に費やすだけでなく、英語試験の勉強にも取り組んだ。日常生活の中で英語を使い続ける環境に身を置きながら、試験対策として文法や語彙、リスニングの学習を進めることで、実践的な英語力と学術的な英語力の両方を鍛えることができた。友人たちと遊び、音楽を奏で、旅行をしながらも、学習を継続するという生活は、留学という経験が単なる非日常ではなく、自分の成長につながる日常そのものであったことを示している。

このように、大学の寮での多国籍な共同生活、キャンパスに残る日本とのつながり、友人たちとの交流、祝祭や音楽、旅行、そして学習に至るまで、私の留学生活は多面的で密度の高いものであった。これらの経験は、異文化の中で生きるとはどういうことかを体感的に理解させると同時に、人と人との関係性が国籍や文化を越えて築かれるものであることを実感させるものとなった。

### 3. 留学を通じて学んだこと

私はケニアへの留学を通して、教育環境、社会構造、そして異文化の中で生きるものの意味について多くのことを学んだ。この留学経験は、単に海外で生活したという体験にとどまらず、日本という国の特徴を相対化して理解し、自分自身の学びの姿勢を見直す重要な機会となった。

まず、最も強く実感したのは、日本における教育環境の安定性と質の高さである。日本では、多くの学生が当たり前のように整った設備、教材、カリキュラムのもとで高度な教育を受けることができる。実験機器やインターネット環境、図書資料なども比較的容易に利用でき、教員からの指導体制も整っている。一方、ケニアの大学では、優秀な学生や研究者が多く存在するにもかかわらず、設備や予算、教材の不足といった制約の中で学習や研究を行っている場面を多く目にした。この経験から、日本における教育の安定性は決して自明なものではなく、非常に恵まれた環境であることを実感した。同時に、その恵まれた環境を「当然」と考えるのではなく、より主体的に活用すべきだと考えるようになった。

また、現地の人々との交流を通して、社会構造に関する重要な気づきも得た。ケニアで出会った大学生や研究者は非常に親切で、知的好奇心が高く、高度な教育を受けている人が多かった。彼らは科学や政治、国際問題についても自分の意見を持ち、活発に議論する姿勢を示していた。しかしその一方で、都市部の外に出ると、十分な教育を受ける機会を持たず、厳しい生活環境に置かれている人々も存在していた。この「高度な教育を受けた層」と「そうでない層」が同時に存在する構造は、発展途上国特有のものだと考えていたが、実際には日本社会にも同様の側面があることに気づかされた。日本でも、教育機会や経済状況による格差は存在しており、それが見えにくいだけである。ケニアでの体験は、社会の中にある不均一性を自覚的に捉える視点を私に与えた。

さらに、異文化に溶け込み、共同体の一員として生活することの楽しさと重要性を学んだ点も、この留学の大きな成果である。留学当初は、言語や生活習慣、価値観の違いに戸惑うことが多く、自分が「よそ者」であるという意識から積極的に行動できない場面もあった。しかし、現地の学生と共に授業を受け、食事をし、日常的な会話を重ねるうちに、少しずつその壁は低くなっていった。自分が相手の文化を尊重し、理解しようと努めることで、相手もまた私を仲間として受け入れてくれるようになった。この経験から、異文化理解とは単なる知識の獲得ではなく、実際にその社会の一部として行動することによって成立するものだと学んだ。また、共同体の一員として受け入れられることは、大きな安心感と喜びをもたらすものであり、それは国や文化を超えて普遍的な価値であると感じた。

学術面においても、重要な成果があった。特に分子生物学に関して、基本的な知識や理論を英語で学ぶ経験は、自身の専門性を国際的な文脈で捉え直す契機となった。これまで日本語で理解していた遺伝子発現、転写、翻訳、タンパク質機能といった概念を、英語の専門用語と結びつけて学ぶことで、単なる翻訳作業ではなく、理論そのものを別の言語体系で再構築する感覚を得た。これは、将来英語で論文を読み、発表し、国際的な研究者と議論する上で不可欠な基礎能力である

と同時に、科学が国境を越えて共有される知識体系であることを実感させる経験であった。

以上のように、ケニア留学を通して私は、日本の教育環境の恵まれた安定性、社会構造における共通性、異文化共同体に属することの意義、そして分子生物学を英語で学ぶ重要性を学んだ。この留学経験は、単なる海外体験ではなく、自国の環境を相対化し、自分の学問的立場と社会的立場を再定義する契機となった。今後は、この経験を生かし、与えられた教育環境を最大限に活用するとともに、国際的な視野を持って研究や学習に取り組んでいきたいと考えている。

#### 4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

ケニアでの留学経験を通して得た学びは、語学力の向上や海外生活への適応力といった表面的な成果にとどまらず、自身の価値観や学問への姿勢を根本から問い直すものであった。私は今後、この留学経験を、自らの学業、研究活動、そして将来的な社会との関わりの中で、段階的かつ実践的に活かしていきたいと考えている。

第一に、学業および研究活動において、留学中に培った「国際的な視点」を生かしたい。ケニアの大学で学ぶ中で、日本とは異なる教育環境や研究条件のもとでも、高い知的水準を保ちながら学問に取り組む学生や研究者の姿を目にした。この経験は、研究が特定の国や環境に閉じたものではなく、世界共通の知的営みであることを実感させた。今後は、日本の恵まれた研究環境を当然視するのではなく、その利点を自覚的に活用しつつ、国際的な研究動向や海外の研究成果を積極的に参照しながら、自身の研究テーマを発展させていきたいと考えている。また、分子生物学の基礎的理論や専門用語を英語で学んだ経験を生かし、英語論文の読解や、将来的な英語での研究発表にも主体的に挑戦していく予定である。

第二に、異文化環境で培った「対話力」と「適応力」を、今後の学内活動や研究室生活の中で生かしたい。留学中、多国籍の学生と共同生活を送り、異なる宗教、生活習慣、価値観を持つ人々と日常的に接する中で、自分の常識が必ずしも普遍的ではないことを学んだ。この経験は、他者の背景を尊重しつつ意見を交換する姿勢の重要性を教えてくれた。今後、研究室やゼミなどで異なる考え方を持つ人と議論する場面においても、単に自分の意見を主張するのではなく、相手の前提や立場を理解したうえで対話を行う姿勢を意識したい。このような態度は、研究を進める上で不可欠な協働関係の構築に大きく寄与すると考えている。

第三に、社会的な観点から、留学を通して得た「格差構造への認識」を将来の進路選択に生かしたい。ケニアでは、高度な教育を受けた層とそうでない層が明確に存在しており、その構造は日本社会にも通じる側面を持つことを実感した。この経験から、科学技術や教育が一部の人のためだけに存在するのではなく、社会全体に還元されるべきものであるという意識を強く持つようになった。将来、研究職や教育に関わる立場になった場合には、専門知識を閉じた世界にとどめるのではなく、一般社会に向けて分かりやすく発信する姿勢を大切にしたいと考えている。留学中に

A4, 3～5 枚

感じた「知識を持つ側」と「そうでない側」の距離を少しでも縮める役割を担うことが、自身の一つの目標となった。

さらに、異文化の中で共同体の一員として生活した経験は、今後の人生において人間関係を築く上での基盤になると考えている。言語や文化が異なる環境に身を置くことで、相手を理解しようとする姿勢そのものが信頼関係の構築につながることを実感した。今後、国内外を問わず新しい環境に身を置く場面においても、自ら壁を作るのではなく、積極的に周囲と関わり、共同体の一員として責任を持って行動する姿勢を維持していきたい。この態度は、研究活動のみならず、社会生活全般においても重要な基礎能力となると考えている。

以上のように、ケニア留学で得た経験は、語学力や異文化理解といった直接的な成果だけでなく、学問への向き合い方、他者との関係の築き方、そして社会を見る視点そのものを変えるものであった。今後は、この経験を一過性の思い出として終わらせるのではなく、日々の学習や研究活動、将来の進路選択の中に具体的に組み込み、継続的に活用していきたいと考えている。留学を通して得た視野の広がりや、自身の専門性の深化と結びつけ、国際的な文脈の中で通用する研究者、あるいは知識を社会に橋渡しできる人材となることを目標として、今後の学修に取り組んでいく所存である。